

トピックス

「京都の通り名歌と江戸時代の書物文化」

京都学園大学 人文学部准教授 鍛治宏介

はじめに

「へ丸竹夷二押御池、姉三六角蛸錦」で始まる歌（以下、横町の歌）は、丸太町通り、竹屋町通り、夷川通りと、京都の町を東西に走る通りの頭文字を連ねた歌で、京都市内在住の者であれば、聞く機会も多い、通り名の歌としてよく知られている。縦横の通りの名を掛け合わせて住所表記を行う京都では、通りの名前を覚えるために、この歌が歌い継がれてきたといわれている。教育学研究者の西岡正子氏が1994年に大学生191名に行った調査によると、「京都育ち」の学生の87%がこの歌を知っていたと回答していた(1)。この「京都育ち」の学生の約半数はこの歌を小学校時代以前に聞いており、聞いた相手としてもっとも多かったのは祖父母や両親であったという。

近年では京都の地方銀行である京都銀行でも、横町の歌の姉妹歌ともいえる「へ寺御幸麩屋富」の歌（以下、堅町の歌）を使ったテレビやラジオのコマーシャルを流しており、この二つの歌（以下、京都通り名歌）は現在の京都在住者にも非常に耳慣れた曲といえる。

また人気アニメ名探偵コナンシリーズの劇場版『名探偵コナン 迷宮の十字路』（監督こだま兼嗣、脚本古内一成、2003年公開、東宝配給）において、京都を舞台に展開するス

トーリーとも深く関連づけた形で、横町の歌が使われており、また「へ姉三六角蛸錦」というフレーズから始まる島倉千代子の「祇園まつり音頭」（西沢爽作詞、船村徹作曲、1957年コロムビア発売、JASRAC 024-5489-1）は、発売から60年近くたった今でも祇園祭の際に流れている。このように京都通り名歌は、複数の世代に渡って、全国的にも一定の知名度をもった歌といえる。

本稿は、この京都通り名歌がこれまでどのように伝えられてきたのか、口承と書承の両面、特に江戸時代の書物文化に注目して検討するものである。江戸時代を専門とする歴史学の研究者である筆者は、近年、天皇像や近江八景といった個別テーマに注目しながら、江戸時代出版された、または筆で書き写された書物を通じて、どのような知識が江戸時代を生きる人びとのあいだに広がっていたのか明らかにしてきた(2)。その研究の一環として、2014年度には、本学において、「江戸時代における書物知の社会的受容に関する研究 ―近江八景を事例に一―」という研究題目にて、京都学園大学奨励研究に採用された。この研究では、近江八景という一つの知識を題材としながら、江戸時代の書物が媒介となって、どのような形で地域イメージが広がっていくか研究を進め、その成果を発表した(3)。実は、京都通り名歌も、筆者が研究している江戸時代の書物文化と深い関連があ

る。本稿では、そのような江戸時代の書物文化研究の一端を知っていただくために、現代の京都人にも馴染みの深い、京都通り名歌の歴史をみていくことにする。

第1章 京都通り名歌の聞き取り調査

京都通り名歌の歴史をみていくにあたって、まず本章では、この歌に関して行われてきた聞き取り調査について検討を加えていく。

2002年に、あいらす児童合唱団が歌い、京都レコードより発売された『京の通り名の歌 一都の歳時記とわらべ歌一』の監修を行った高橋美智子氏が、この歌の新たな継承に果たした役割は大きなものがある。声楽家であり、あいらす児童合唱団の創設者でもある高橋氏は、京都市内のわらべ歌の採譜活動を行い、児童文学作家中川正文氏との共著『京わらべうた』において、四種類の通り名歌の楽譜を掲載している(4)。うち二曲の歌詞を掲載しておく。

ぼんさん^{あたま}頭は丸太町^{まるたまち}／つるつとすべって竹^{たけ}
屋町^{やまち}／水の流れは夷川^{なみ}／二条^{にじょう}で買った生薬^{きぐすり}
を／ただでやるのは押小路^{おしこうじ}／御池^{おいけ}ででお
た姉^{あねさん}三^{さん}に／六銭^{ろくせん}もろうて蛸^{たこ}買^かうて／錦^{にしき}でお
として四^しかられて／綾^{あや}まったけど仏^{ぶつ}々^つと／
高^{たか}がしれてる松^{まつ}どしたろ

まるたけえびす^{まるたけえびす}におしおいけ^{おしおいけ} あねさん^{あねさん}ろっかくたこ^{ろっかくたこ}にしき^{にしき} しあやぶつ^{しあやぶつ}
丸竹夷^{まるたけえびす}二押御池^{におしおいけ}／姉^{あねさん}三^{さん}六角^{さんかく}蛸^{たこ}錦^{にしき}／四^し綾^{あや}仏^{ぶつ}
たかまつまん^{たかまつまん}ごじょう^{ごじょう}せきだ^{せきだ} ちやらちやら^{ちやらちやら}うお^{うお} たな^{たな}
高松^{たかまつ}万^{まん}五^ご条^{じょう}／雪^{ゆき}駄^だちやらちやら^{ちやらちやら}魚^{うお}の^の棚^{たな}
ろくじょう^{ろくじょう}さんてつ^{さんてつ} ひっちょう^{ひっちょう} こ^こはつ^{はつ}
六^{ろく}条^{じょう} 三^{さん}哲^{てつ}とお^おりすぎ^{りすぎ}／七^{しち}条^{じょう} 越^こえれば八^{はち}
くじょう^{くじょう} じゅうじょう^{じゅうじょう}とうじ^{とうじ}
九^く条^{じょう}／十^{じゅう}条^{じょう} 東^{とう}寺^じでとどめさす

※二曲ともに原文では振り仮名は楽譜に別掲

高橋氏は、さらに『日本わらべ歌全集』第15巻として刊行された『京都のわらべ歌』においても、「丸竹夷」の楽譜を再掲するとともに、参考歌として、ふしは現在消滅しているとしながら、堅町の歌の歌詞も掲載している(5)。

てら^{てら} こ^ここ^こ ふ^ふ や^や とみ^{とみ} やなぎ^{やなぎ} さかい^{さかい} たか^{たか} あい^{あい} ひがし^{ひがし}
寺^{てら}、御幸^{ごこう}、麩屋^{ふや}に富^{とみ}、柳^{やなぎ}、堺^{さかい}、高間^{たかあい}の東^{ひがし}は
くるま^{くるま}や^や ちよう^{ちよう} からす^{からす} りよう^{りよう} もろ^{もろ} ころも^{ころも} しん^{しん} かま^{かま} にし^{にし}
車^{くるま}屋^や町^{ちよう}、烏^{からす}、両^{りよう}、室^{もろ}、衣^{ころも}、新^{しん}、釜^{かま}、西^{にし}、
おがわ^{おがわ}で、ほりかわ^{ほりかわ}
小川^{おがわ}で、堀川^{ほりかわ}の水

なお凡例によれば、両歌はともに、上京区・下京区からなる明治初年までの市域である旧京都市域において、伝承者やその母親もその土地である人に留意して、高橋氏が採集した歌である。高橋氏は、その後、『便用謡』と『翁草』という江戸時代の書物(第2章で詳述する)に基づき歌詞を復元した堅町の歌に、節を新たにつけて、復曲を行っている(6)。

てら^{てら} こ^ここ^こ ふ^ふ や^や とみ^{とみ} やなぎ^{やなぎ} さかい^{さかい} たか^{たか} あい^{あい} ひがし^{ひがし}
寺^{てら} 御幸^{ごこう} 麩屋^{ふや} 富^{とみ} 柳^{やなぎ} 堺^{さかい}／高^{たか} 間^{あい} 東^{ひがし}
くるま^{くるま}や^やちよう^{ちよう} からす^{からす} りよう^{りよう}がえ^{がえ} むろ^{むろ} ころも^{ころも} しん^{しん} まち^{まち} かまん^{かまん}ご^ご
車^{くるま}屋^や町^{ちよう}／烏^{からす} 両^{りよう}替^{がえ} 室^{むろ} 衣^{ころも}／新^{しん}町^{まち} 釜^{かま}座^ざ
にし^{にし} おがわ^{おがわ} あぶら^{あぶら} さめがい^{さめがい} ほりかわ^{ほりかわ} みず^{みず} よし^{よし}や^や
西^{にし} 小川^{おがわ}／油^{あぶら} 醒^{さめ}井^{がい}で 堀川^{ほりかわ}の水^{みず}／葎^{よし}屋^や
いの^{いの} くろ^{くろ} おおみや^{おおみや} まつ^{まつ} ひぐらし^{ひぐらし} ち^ち え^え こういん^{こういん}
猪^{いの} 黒^{くろ} 大宮^{おおみや}へ 松^{まつ} 日暮^{ひぐらし}に 智恵^ち光^え院^{こういん}／
じよう^{じよう}ふく^{ふく} せん^{せん}ばん^{ばん} にし^{にし}じん^{じん}
浄^{じよう} 福^{ふく} 千^{せん}本^{ばん} さては西^{にし}陣^{じん}。

高橋氏の活動により、京都通り名歌はより広く知られることになったが、高橋氏以外にも多くの論者が、この歌の存在について言及している。以下、伝承童謡研究や民俗学、郷土史、言語学など、さまざまなアプローチで行われた、京都通り名歌の聞き取り調査にを概観する。

1900年代から10年代にかけて、国民文学論の高まりのなか、全国的な民謡調査が行われ、『日本民謡全集』(正・続)、『諸国童謡大全』、『俚謡集』といった報告書がだされた(7)。

これらの報告書には京都の事例も掲載されるが、いずれも京都通り名歌は載っていない(8)。

京都独自に行われた童謡や民謡の聞き取り調査としては、京都市内の小学校で教員を勤めた真下滝吉氏(号は飛泉)が、京都市所在の幼稚園で蒐集されたものを整理した『古来京都附近に唄はれたる童謡と其研究』や、京都の郷土史家として著名な田中緑紅氏による『京都の童謡』などがあるが、そこにも京都通り名の歌は載っていない(9)。

寡見の限りでは、京都通り名歌について、明治以降で最初に言及したのは、在野の古代史研究者藪田嘉一郎氏による「京都の大小路の名を暗ずる歌」に関する次の記述である(10)。

東西に通ずる道路即ち横の筋の「丸竹夷二押御池姉三六角蛸錦云々」は、今でも人口に膾炙してゐるが、南北に通ふ豎の筋の方は余り人が知らないようである

ここから、高橋美智子氏が復曲をおこなった豎町の歌は、藪田氏がこの記録を書いた1938年の段階で、すでに「余り人が知らない」という状態になっていたことがわかる。

京言葉研究で著名な京都生まれの言語学者榎垣実氏も、藪田氏の9年後に、京都通り名歌を書き留めている(11)。

まる たけ えびす に おし おいけ
あね さん ろっかく たこ にしき し
あや ぶっ たか まつ まん ご…

寺町 御幸町 麩屋町 富小路 柳馬場

堺町 高倉 間之町 東洞院 車屋町 烏丸
丸 両替町 室町 新町…

榎垣氏の記述には、詳しい説明がなく詳細は不明であるが、横町の歌が平仮名表記であるのに対して、豎町の歌が漢字表記であり、横町の歌のみが口承の記録とも推測できる。

さらに、先述した田中緑紅氏の子息で同じく京都の郷土史に関する著述も多い田中泰彦氏が、私家版『きょうのわらべうた』において、次の報告をしている(12)。

丸、竹、夷、二、押、御池、姉、三、六角、蛸、錦、四、綾、仏、高、松、万、五条、雪駄、ちゃら、ちゃら、魚の棚、花の御前、北、七条

坊さん頭は丸太町、どっこいすべって橋の下、川の流れは夷川、二条で買った生薬を、只でやるのは押小路、御池で逢うた、姉・三に、六銭貰うて、蛸・錦、四、綾、仏、高、松、万、五条、雪駄、ちゃら、ちゃら、魚の棚、花の御前、北、七条

田中泰彦氏は、この二つの歌を載せるとともに、江戸時代の随筆『翁草』から「洛中豎小路」「洛中横小路」も掲載したうえで、「これらは童歌というよりは、明治初期にお習字の手本に書かれて歌われたものです。」と記しているが、その典拠は示していない。さらに田中氏は「京のわらべ唄」として、先の報告の16年後にも同様の報告を行っており、若干異なる歌詞を持つ歌を掲載している(13)。

坊さん頭は丸太町、どっこいすべって竹屋

町、川の流れは夷川、二条で買った生薬を、ただでやるのは押小路、お池でおうた姉三に六銭もろうて蛸錦四綾仏高松満五条、せったちゃらちゃら魚の棚、花の御前、北七条

京町づくし

豎町

建仁寺町・土手町・中町・河原町・寺町・御幸町・麩屋町・富小路・柳馬場・堺町・高倉・間之町・東洞院・車屋町・烏丸・両替町・室町・衣棚・新町・釜座・西洞院・小川・油小路・醒井・堀川・葎屋町・猪熊・黒門・大宮・泉町・松屋町・日暮・知恵光院・裏門・浄福寺・千本・六軒町・七本松・御前通・西京

1981・1982年度の両年度に渡り、京都府教育委員会が京都府に残る民謡の緊急調査を行っており、その調査報告書にも京都通り名歌が収録されている(14)。この調査の調査員に高橋氏の名前も含まれており、報告書に掲載されている歌は、先述の高橋氏の著書掲載のものとかわらない。

1991年度には、言語学者で京都方言研究の第一人者である中井幸比古氏が、方言音調研究の一環として、京都通り名歌の聞き取り調査を行っている(15)。中井氏の調査は、聞き取り対象者15名それぞれの、使用語句やアクセントの違いなどに留意した詳細な調査であり、また関連文献の博搜という点でも類をみないものである。中井氏の指摘は多岐に及ぶが、重要なものを以下に列挙する。

- ・京都通り名歌は本や教科書ではなく口伝えで覚えた。バナナの叩き売りが拍子を取るのに使っていたのを聞き覚えた者もいた。
- ・横町の歌の丸太町以北は全員が知らず、五条以南は話者により認知度が異なってい

た。

- ・豎町の歌については、伝承がなく、道の名を列挙するのみである。

中井氏の調査では、調査対象者により微妙に異なるアクセントや歌詞で歌っており、口伝えでの伝播が基本系であったことがうかがえる。

また聞き取り調査ではないが、児童文化研究家の上笙一郎氏も、近年、次のように興味深い指摘を行っている(16)。

今日では、ジャーナリズムの発達により広く京都圏全体に知られているが、かつては、〈中京室町言葉〉を使う中京・下京の祇園社氏子圏内でうたわれていた。商家に奉公し仕事や行儀作法を仕込まれる少年少女が、使い走りに出て不自由せぬよう、日用の心得として口ずさみ暗記させる実用教材であった。それが、音律があつてうたいやすく言葉も面白いところから、主家の子の守りの際の口遊び唄に転用され、わらべ唄ともなったのである。

もともと京都中心部の一部地域のみで、奉公人の教育に使われていた歌がわらべ歌となったというのである。ただし上氏は、上記の記述の典拠を記しておらず、どのような典拠に基づき、このような断定的な論述となっているのかわからない。実は、京都の商家に関する古典的研究としてしられる中野卓氏『商家同族団の研究』において中野氏も、横町の歌について、「頭字を連ねて、句調よく歌うようとなえて、子供や丁稚や下女に教えた」(17)と、上氏と同様の指摘をしており、そのような実態が一部でみられたことも十分想定できる。ただし、たとえば職人層が使う西陣言葉のなかにはみられないのか、「かつ

て」とはどの年代を指すのかなど、典拠がわからない以上、判断を保留すべき点も多い。

以上、京都通り名歌に関する聞き取り調査について主に検討した。横町の歌については、幅広い伝播が確認でき、また伝播の過程でさまざまな変貌を遂げていること、堅町の歌については、昭和初期、1938年の段階で、すでに伝承が確認できなかったことが確認できた。本章でとりあげた研究で一部紹介されているように、江戸時代に書かれた文献資料にも、京都通り名歌に関する記述をみいだすことができる。次章では、京都通り名歌に関する文献研究の成果について、検討を加えていく。

第2章 京都通り名歌に関する

江戸時代の文献資料

本章では、京都通り名歌に関する江戸時代の文献資料を検討していく。

まず検討するのは、江戸時代中期の京都で役人を務めた人物による記録として、都市史研究などでも用いられることも多い『翁草』である。『翁草』は、京都町奉行所与力神沢貞幹（号は其蛸庵杜口）が与力辞職後に長年に渡って書き継ぎ、寛政3年（1791）に全二百巻にて完成したものであるが、その五九巻「五音開合及記憶伝の事」という、発声方法と、和歌八代集、源氏物語の巻名、近年の年号など、さまざまな事物を暗記するための歌を紹介する記事のなかに、「洛中堅小路」「同横小路」の歌が載っている（18）。なおこの記事のなかに、「天明は八」という記述があり、寛政1～3年（1789～1791）に書かれた記事と類推できる。

洛中堅小路

寺^{マチ}御幸^{マチ}麩屋^{テウ}富^{コウジ}柳^{ババ}堺^{マチ}頂^妙
寺通今高倉ト云 間のマチ 東にトウキン車ヤテウ
 烏丸 両か^{ガヘマチ} 室^{マチ} 衣^{クナ} 新^{マチ} 釜
ンザ 西トウイン小河 油コウジ 醒ガキ 堀カハ
 よしや^{マチ} 猪隅 黒^{モン} 大宮^ヤ 松^{ヤテウ}
 日暮しに 智恵光院 浄福^{寺通} 千本 扱
 は西陣

同横小路

鞍や^{馬口} 寺^{ノ内} 上立^亮 五つ^辻 今や^{出川}
 元^{誓願寺} 武^者 小路^{一条} 中立^亮 長者^町 三通り
 出水 下立^亮 樫木^町 丸太^町 竹^{ヤ町} 夷^川
二条 押小路 お池に 姉小路 三条 六角
 蛸^{薬師} 錦^{小路} 四条 綾^{コウジ} 仏^{コウジ} 高辻や
 松^原 万寿寺に 五条 せきだや 魚の棚
 珠数屋 二筋 万年寺 七条越て通り町な
 し

本書への京都通り名歌の掲載については、先述した田中泰彦氏を始め、多くの論者が言及しており、近年でも高橋康夫氏が京都の都市史研究の立場から（19）、また有馬敲氏がわらべ歌研究の立場から（20）、『翁草』と現行のわらべ歌との相違点などについて検討している。

次に、江戸時代中期の小謡本『便用謡』を検討する。能の声楽部分である謡は、室町時代後期には、堂上や地下に普及し、演唱や鑑賞の対象として楽しまれたが、江戸時代に入り、謡の需要層は町人一般にも広がりを見せるようになり、出版文化の発達とともに、能の詞章を記し、それに節付を示す譜を傍記した謡本が数多く出版されるようになる（21）。謡の広範な浸透とともに、謡曲のなかからまとまった一節だけを謡う、より手軽な小謡も好まれるようになり、婚礼や宴席で「高砂」などのめでたい小謡を謡う風習が広まり、小

謡本の刊行も相つぐ。『便用謡』は、そのような小謡本の一種で、享保8年(1723)に江戸の三浦庚妥が著し、刊行したものである。『便用謡』には、日本の国名尽「秋津国」や、代々の天皇の名前を列挙した「王代記」など全部で15曲の謡が掲載されているが、そのうち一曲「九重」が、京都の町名を書きつらねたものである(22)。

今洛陽の名目を。世俗に呼は樵木町。川原
 樵木新新からすま。是より略の狂歌とす。
 へ寺御幸麩屋富柳塚高。間の東に車烏丸。
 又一ツ首には両が室衣新釜西小川。油醒
 井。堀の岩神 猪黒大松日暮シに智恵光院。
 浄福千本。右近かねがへ。扱横小路は鞍社
 寺上立に五辻や。須磨今出川本誓に。武者
 とつらねて一中や。三筋の長者出水下。魚
 丸竹屋夷二条押 へ御池姉三六角に蛸錦。
 四綾仏光高辻に松。樋口五条楊梅。六条佐
 女牛や七の坊。北七条に塩とかや。八の坊
 梅八条に。針信濃から橋。九条是そ九重。

本史料は、芸能史や能面研究者として知られ、本学の前身京都文化短期大学の教員でもあった中村保雄氏が全文を紹介したことで、広くしられるようになった史料である。中村氏は、本書の内容の一部は室町末期頃から広まっていた記事であり、さらに往来物的小謡本の頭書記事のなかに、受け継がれていくことを指摘している。

長谷川博史氏が指摘するように、江戸時代中後期に展開する手習い教育のなかで小謡を活用する事例は多く、往来物の付録記事にも、謡関係の記事は多くみられた(23)。このような教育的役割を持っていた小謡を通じて、京都通り名歌は、人びとの間に広まっていったのである。

なお『翁草』と『便用謡』を比べると、『便用謡』では「高。間の東に車烏丸」となっているところが、『翁草』では「頂ア妙イ寺カ通ラスマ今高倉ト云 間のマチ 東にトウキン車ヤテウ 烏丸」とあり、成立がより新しい『翁草』の方に、寛文13年(1673)頃まで使われていたという(24)、より古い通りの名前である「頂妙寺通」が残っていることから、それぞれの情報源は異なることがうかがえる。

戦後歴史学をリードした代表的研究者の一人であり、特に芸能史の分野で多大な業績を残した林屋辰三郎氏は、江戸時代の京都人の教養の二本柱は、一つが古典を母体とした謡曲であり、一つが実用と娯楽を兼ね備えた節用集にその根底があり、そのような京都人の古典性と実用性の交点に生れたのが『便用謡』であり、そこに載る曲は京都の町会などで、謡の素養のある人びとによって練習され、子弟の教養伝達にも使われたと指摘している(25)。またその中で、「いわゆる「丸竹夷二押御池」という東西路の数え方も、これによってはじめて伝えられたものと考えることができる」(25)と指摘している。林屋説は、京都市の自治体史である『京都の歴史』、日本の代表的歴史書『岩波講座 日本歴史』に掲載されたのみならず、さまざまな事典、研究書、一般書でも繰り返されることで(27)、またその説が他の著者により引用されることで、大きな影響力を持った(28)。

しかし林屋氏が京都通り名歌を初めて書き記した史料と想定していた『便用謡』より早く、通り名歌を載せる史料も知られている。それが近松門左衛門の浄瑠璃作品で、宝永4年(1707)に大坂・竹本座で初演がなされた世話物『堀川波鼓』である。その下巻冒頭は次のように始まる(29)。

寺、御幸、麩屋、富、柳、堺町、間の、東
 は玉敷の、御垣に囲ふ五つ緒の車、烏丸、
 両替、室、衣、新、釜、西、小川、油、醒
 が井、堀川の岸の平砂を白波に照せば、今
 も夏の夜のしも立売のほの／＼明け

真下五一氏や三浦陸夫氏は、京都通り名歌への言及のなかで、『堀川波鼓』について紹介しているが、ごく簡単な紹介に留まっている(30)。それでは近松研究のなかでは、この記述はどのように説明がなされているであろうか。1922年の段階で、早くも演劇研究家木谷蓬吟が、次の様な興味深い指摘を行っている(31)。

下の巻の冒頭には、京都の名づくしが見へる。東は寺町から西は堀川に至るまで南北の町筋の名を順々に書き並べてゐる。手習子の用文章向きに出来てゐて面白い。或は実際手習本に作ったものを、こゝに用ひたのかも知れぬ。と云ふのも、近松は他に『龍田詣』の習字本を書いている例があるからである。

通り名歌と手習い教育との関連に触れているという点で、非常に先見性のある指摘といえる。さらに1927年刊行の『近松全集』では、当該箇所頭注に次のようにある(32)。

寺御幸云々 京の大路を暗んずる歌二首あり。寺御幸麩屋富柳堺町相の東に車にからす。両が室衣新釜西小川油醒井葭屋猪熊。(略)

解説を書いている国文学者藤井乙男氏によれば、近松のこの記述は、豎町の名前を暗唱する歌二首がもとになっているという。この

頭注の説明は、以後、刊行される『堀川波鼓』の注釈書に踏襲される(33)。しかし山根為雄氏も指摘するように、この歌二首の典拠はどの本にも記されていない(34)。実は、この二首については、先述した藪田嘉一郎氏が紹介するように(35)、江戸時代後期の考証随筆家山崎美成による『海録』巻十二にも掲載されているが、ここにもその出典は明記されていない(36)。この出典については次章で言及することとしたい。

以上、みてきたように、これまでの研究では、江戸時代中期の考証随筆『翁草』や、小謡本『便用謡』、近松門左衛門の浄瑠璃作品『堀川波鼓』といった作品に、京都通り名歌が掲載されていることが指摘されてきた。手習い教育との関連など興味深い指摘もなされているが、歌として広まったのが先か、書物に掲載されたのが先か、その前後関係は、これまでの指摘ではわかっていない。次章では、先行研究では指摘がなされていない京都通り名歌のさらに古い典拠を指摘するとともに、江戸時代書物文化の特色に踏み込んでみたい。

第3章 節用集付録記事と京都通り名歌

林屋辰三郎氏が、『便用謡』は、能謡の古典性と節用集の実用性を兼ね備えた書物であることを指摘していることを、前章で紹介した。ただし林屋氏は、節用集の内容については全く具体的には言及していない。筆者は、以前から、節用集や、往来物、重宝記、大雑書といった、日用教養知識を広い階層に伝える性格の書物を日用教養書と名付けて注目しており、実は、京都の通り名歌が確認される最も古い出典は、日用教養書の付録記事のなかに確認できることをすでに指摘している(37)。しかし、その際は事実の単純な指摘に

とどまっていたので、今回、日用教養書における通り名歌の展開をより詳細に検討したい。

貞享3年(1686)に江戸で出版された『広益二行節用集』(図①)には、通り名歌が京都の通り名の一覧とともに掲載されている(38)。

きやうたて うた しゆ
京堅町之歌 二首

てらこ ふやとみ やなぎ かい てう ひがし
○寺御かうふやとみ柳さかい頂あいの東に
くるまからす
車 烏丸

りやう むろ しんかま こがはあぶら ほり
○両が室ころも新釜にし小川油や堀によし
みや
や猪の宮



図① 『広益二行節用集』
(['節用集大系』第20巻)

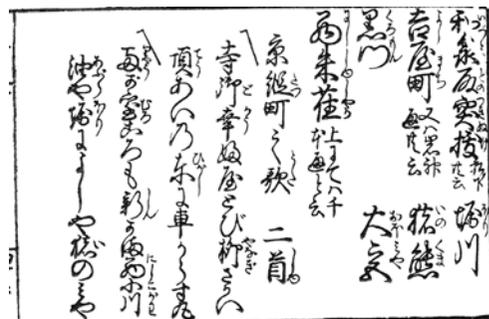
国文学者藤井乙男氏が指摘した『堀川波鼓』の典拠の堅町の歌二首とは、この『広益二行節用集』に載る歌のことであろう。実際、通り名などを比較しても、両者は似通っており、ほぼこの歌からの派生とみてよいであろう。また「頂あいの東に車」とある箇所から、『翁草』が参照した歌もこの歌と同じ系統のものと推定できる。

近年、節用集の付録記事に関して大著を著した柏原司郎氏の調査によると、「京町尽し」や「京都坊名」「京師九陌」など、京都の地理情報の付録記事を載せる節用集は膨大にあるが、歌の形での記事は、本書が初出となる(39)。

同様の記事は、他の節用集にも確認できる。例えば元禄3年(1690)の跋を持つ『頭書大益節用集綱目』では、先の『広益二行節用集』と同じく、「京町小路横町之名」「同縦町之名」「京縦町之歌」を確認できる(40)。なおこの両書は、刊行書肆は異なるが、後者が前者の抄略本に近い関係にあることが指摘されている(41)。また天明2年(1782)刊行の『大成正字通』(図②)では、「色紙短冊寸法書法



図② 『大成正字通』
(['節用集大系』第41巻)



図③ 『万民調宝記』
『江戸時代流通字引大集成』第34ルール

の事」という付録記事のうち、「京の町、歌にてしる事」として以下の短冊二枚を載せる(42)。

寺御幸ふやとみやなぎさかい高／あいのひ
がしにくるまからすま
両替室ころもしんかまにし小川／あぶら
ほり川いのおほほみや

これと同様の付録記事は、『大成正字通』の板元にも名を連ねる村上勘兵衛を板元として、享和2年(1802)に刊行された『節用早引大全』にも掲載されている(43)。

またこれらの付録記事は、節用集だけに載るものではない。元禄5年(1692)に大坂や江戸の書肆が刊行した重宝記『万民調宝記』(図③)にも、先の『広益二行節用集』と同じ付録記事「京町小路横町之名」「同縦町之名」「京縦町之歌二首」が載っている(44)。

室町中期にいろは引きの国語辞書として成立した節用集は、いわゆる古本節用集の時代から、「いろは」の最後に「京」という項目があり、そこに「京師九陌」として、平安京の条理の情報が掲載されていた(45)。このような平安京の地理情報は、文安元年(1444)の序文がある辞書『下学集』(46)、さらにさかのぼって鎌倉末期の有職故実書『拾芥抄』(47)、また保安3年(1122)ごろに成立したと推測されている三善為康の『掌中歴』(48)などにも掲載されており、節用集の記事もその流れを引き継ぐものといえる。16世紀末、節用集の形態が写本から刊本に移っていても、「京師九陌」情報は引き続き、多くの節用集に載り続けており、柏原司郎氏は天正18年(1590)から文久4年(1864)まで、148冊の節用集に「京師九陌」記事が載っていることを報告している(49)。たとえば慶

長16年(1611)に出版された『節用集』では、次のような記事が載っている(50)。

京師九陌横堅小路一条正親町土御門鷹
司近衛勘解由小路中御門春日大炊御
門冷泉二条押小路三条坊門姉小路三
条六角四条ノ坊門錦小路四条綾小
路五条ノ坊門高辻五条樋口六条ノ坊門
楊梅六条佐目牛七条ノ坊門北小路七条
塩小路八条ノ坊門梅小路八条針小路
信濃小路唐橋九条已上南北堅小路三十八町也。
朱雀西坊城壬生櫛笥大宮猪熊堀川
油小路西洞院町室町烏丸東洞院
高倉万里小路富小路京極朱雀

已上東西十八町也。但以大内、
為中央東京分也。西京略之。

ここに載る道の名前は、朱雀大路など、平安京の街路の情報であり、秀吉の都市改造の一環として洛中散在寺院の強制移転により作られた寺町通りなど、新しい街路情報は含まれていない。写本から刊本へ形態は変わっても、中身は古い情報がそのまま載っていることがわかる。

しかし、新しい時代に適応した辞書として節用集が変質していくに際して、秀吉の都市再開発後の京都の街路情報を反映した「京町尽」もあらわれてくることになる。実は先に紹介した堅町之歌が載る『広益二行節用集』は、「京町尽」の初出でもある。そのような変化の際に、おそらく書肆の新規企画の一つとして産み出されたのが京都の通り名歌であったのであろう。

京都の通り名一覧は、この後、日用教養書の付録記事として、また単独の往来物としても刊行されていき(51)、手習い教育の現場においても、京町尽を手本とする事例は多数散見されるようになる。別稿で述べたように、

このような京都情報が一般教養として拡散していき、さらに王朝文化のイメージも付与されることで、江戸時代に生きる人々の間で、一定の京都イメージが醸成されていく(52)。先述した『便用謡』は、京都から遠く離れた隠岐・島前、海士村の村上助九郎家の天保5年(1834)頃作成の蔵書目録にも名前が載っている(53)。京都の通り名の歌は、書物という形で、遠く隠岐の地にも届いていたのである。

そのような書物を媒介とする全国的な展開とは別に、京都においては、街路情報を覚えるための歌が横町においても生み出され、口伝えで広められていったのであろう。

おわりに

散漫な記述を続けてしまった。第3章で明らかにしたように、京都の通り名歌は、書物文化が発展するなかで産み出された知識であった。しかし、それは決して書物知としてのみ展開したのではない。第1章で紹介した20世紀の調査記録においても、第2章で紹介した江戸時代の史料のなかでも、本文の差異はいくつも生じていた。書物知として広がり、さらに、それが人々の間で、口伝えで、変容を伴いながら広がり、それがまた書物のなかに立ち現れる。このような多様な回路を通じて、変化を伴いながら伝えられてきたのが京都の通り名歌であり、これこそが、書物の時代、江戸時代における情報伝播の形態であった。

本稿では、これまで京都通り名の歌の初出とみられていた近松門左衛門『堀川波鼓』の初演より、さらに21年前に出版された『広益二行節用集』に豎町の歌が掲載されていたことを明らかにした。それでは近松が浄瑠璃

を書くにあたって、節用集を参照していたのであろうか。その点、浅学の筆者にはわからないので、識者の指摘を俟ちたい。近松が節用集類を手元に置いていた可能性も十分に想定できるが、彼は、10代後半から54歳ころまで、京都の宮川町や、相国寺の辺りに40年近く住んでいた(54)。近松がこの歌を知ったのは、口承だったのか、書物を介してなのか、現段階では明らかにできない。口承と書承の問題は、今後も追求していきたい。

もう一点指摘すると、第1章でみたように、京都通り名歌は、これまで「わらべ歌」として扱われてきた。しかし、第2・3章でみた資料では、いずれも「わらべ歌」としてでているわけではない。先述したように、『便用謡』などの小謡本は、手習教育にも深い関係があるが、決して子供だけが嗜むものではない。京町尽は日用教養書の付録記事などにも載るが、その読者は子供よりも大人が中心である。「わらべ歌」の形成ともかかわる問題として、先の疑問とあわせて、追求すべき問題である。また、なぜはじめは豎町の歌だけであり、いつから豎町の歌が消えていったのか等々、不明な点は数多く残るが、許された紙数も大幅に過ぎてしまった。今後の課題としたい。

[注]

- (1) 西岡正子「成熟都市京都の社会教育」(佛教大学総合研究所編『成熟都市の条件』(『佛教大学総合研究所紀要』第3号別冊)、佛教大学総合研究所、1996年)。
- (2) 拙稿①「江戸時代教養文化のなかの天皇・公家像」(『日本史研究』第571号、日本史研究会、2010年)。拙稿②「近江八景詩歌の誕生」(京都大学文学部国語学国文学研究室編『国語国文』第81巻第2号、中央図書出版社、2012年)。拙稿③「近江

- 八景詩歌の伝播と受容」(『史林』第96巻第2号、史学研究会、2013年)など。
- (3) 拙稿④「地域イメージの定着と日用教養書」(横田冬彦編『本の文化史 第1巻 読書と読者』平凡社、2015年)。
- (4) 高橋美智子・中川正文『京わらべうた』駈々堂出版、1972年 38～42頁。
- (5) 高橋美智子「丸竹夷(地口歌)」(高橋『日本わらべ歌全集 第15巻 京都のわらべ歌』柳原書店、1979年) 249頁。
- (6) 高橋美智子「『丸竹夷』と『寺御幸』」(高橋『うしろの正面』柳原書店、1986年) 108頁。
- (7) 坪井秀人「〈国民の声〉としての民謡」(坪井『感覚の近代—声・身体・表象—』名古屋大学出版会、2006年 初出：中山昭彦ほか編『文学の闇／近代の「沈黙」』世織書房、2003年)
- (8) 前田林外編『日本民謡全集』正編・続編、本郷書院、1907年。童謡研究会編『諸国童謡大全』春陽堂、1909年。文芸委員会編『俚謡集』国定教科書協同販売所、1914年。
- (9) 『古来京都附近に唄はれたる童謡と其研究』京都市保育会、1920年。田中緑紅『京都の童謡』(京都記録叢書別巻1)郷土文化研究会、1943年。
- (10) 藪田嘉一郎「節拍抄(1)」(『史迹と美術』第86号、史迹・美術同攷会、1938年) 36～37頁。
- (11) 榎垣実『京都のわらべ唄』(青年叢書11) 関書院、1947年 109～110頁。
- (12) 田中泰彦『きょうのわらべうた』田中泰彦、1954年 24頁。
- (13) 田中泰彦「京のわらべ唄」(『郷土資料』第2巻第4号、京を語る会、1970年) 170～171頁。
- (14) 『京都府の民謡 一民謡緊急調査報告書一』京都府教育委員会、1983年。
- (15) 中井幸比古「洛中洛外の地名とアクセント」(『方言音調の諸相—西日本(3)—』(「日本語音声における韻律的特徴—西日本における音声の収集と研究—」研究成果刊行書) 徳川宗賢、1992年)。中井幸比古「京都府丹波山城域言語地図(1)—調査の概要と、語彙(1)—」(『香川大学教育学部研究報告』第I部第85号、香川大学教育学部、1992年)。
- (16) 上笙一郎「丸竹夷二」(上笙一郎編『日本童謡事典』東京堂出版、2005年)。
- (17) 中野卓「同業街における同族連合組織—二条通り薬種卸商同業街の事例—」(中野『商家同族団の研究』未来社、1964年) 328頁。
- (18) 『翁草』巻五九(『校訂 翁草』第六巻、五車楼書店、1889年) 121～122頁。
- (19) 高橋康夫「京の通り名」(高橋『海の「京都」—日本琉球都市史研究—』京都大学学術出版会、2015年 初出：高橋康夫・中川理編『京・まちづくり史』昭和堂、2003年)。
- (20) 有馬敲「伝承わらべうた今昔」(有馬『時代を生きる替歌・考—諷刺、笑い、色気—』人文書院、2003年)。
- (21) 表章「“うたい”(謡)考—その発達史を中心に—」(表『能楽史新考』わんや書店、1979年 初出：『文学』第25巻第9号、岩波書店、1957年)。
- (22) 中村保雄「『便用謡』について—謡文化の一つの道—」(『芸能史研究』第38号、芸能史研究会、1972年)。芸能史研究会編『日本庶民文化史料集成 第3巻 能』三一書房、1978年)。
- (23) 長谷川博史「謡文化の普及と寺子

- 屋」(『紀要』第13号、聖徳学園短期大学、1980年)。
- (24) 「高倉通」(『日本歴史地名大系 第27巻 京都市の地名』平凡社、1979年)。
- (25) 林屋辰三郎「伝統文化の組成」(京都市編『京都の歴史 第6巻 伝統の定着』学芸書林、1973年)。林屋辰三郎「庶民生活と芸能」(『岩波講座 日本歴史 第12巻 近世四』岩波書店、1976年)。
- (26) 前掲注(25) 林屋「伝統文化の組成」122頁。
- (27) 林屋辰三郎「総論」(『京都市の地名』(日本歴史地名大系) 平凡社、1979年)。林屋辰三郎『人間・故郷・文化』朝日新聞社、1980年。林屋辰三郎『日本史論聚 第5巻 伝統の形成』岩波書店、1988年。
- (28) 守屋毅『京の町人 一近世都市生活史一』(教育社歴史新書) 教育社、1980年 86～88頁。辻本雅史「近世中期の教育」(衣笠安喜編著『京都府の教育史』思文閣出版、1983年) 137～139頁。
- (29) 『堀川波鼓』下巻(『新編日本古典文学全集 第75巻 近松門左衛門集②』小学館、1998年) 516頁。
- (30) 真下五一「上ル下ルに、東入ル西入ル」(真下『京ことば集』芸術生活社、1975年)。三浦睦夫「京都の通り名唄」(『京都の大路小路』小学館、1994年)。
- (31) 木谷蓬吟編『解説注釈 大近松全集』第3巻、大近松全集刊行会、1922年 529頁。
- (32) 藤井乙男『近松全集』第8巻、朝日新聞社、1927年 38頁。
- (33) 若月保治『全訳近松傑作集』第3巻、太陽堂書店、1930年 49頁。鳥越文蔵校注『新編日本古典文学全集 第75巻 近松門左衛門集2』小学館、1998年 516頁。
- (34) 山根為雄「堺町(堀川波鼓)」(山根『近松正本考』和泉書院、2004年) 414頁。
- (35) 前掲注(10) 藪田「節拍抄(1)」37頁。
- (36) 山崎美成『海録』国書刊行会、1915年 328～329頁。
- (37) 前掲注(2) 拙稿①「江戸時代教養文化のなかの天皇・公家像」70頁。
- (38) 『広益二行節用集』8巻〈江戸 万屋庄兵衛刊』(『節用集大系』第20巻、大空社、1993年) 682～683頁。
- (39) 柏原司郎編『増補改訂版 近世の国語辞書節用集の付録』おうふう、2015年。
- (40) 『頭書大益節用集綱目』第五巻巻末〈京都 津田氏宗智・山本五兵衛刊』(『節用集大系』第22巻、大空社、1994年)。
- (41) 高梨信博「近世節用集の一展開 一四十七部系から四十五部・四十四部系へ一」(『国文学研究』第123集、早稲田大学国文学会、1997年) 17頁。
- (42) 『大成正字通』八巻四丁裏〈天明2年(1782)、大坂 吉文字屋市兵衛、京 村上勘兵衛、江戸 吉文字屋次郎兵衛刊』(『節用集大系』第41巻、大空社、1994年)。
- (43) 『節用早引大全』三八〇丁表〈享和2年(1802)、京都 村上勘兵衛刊』(『江戸時代流通字引大集成 一国立国会図書館蔵 亀田次郎蒐集一』第34 リール、雄松堂書店、1988年)。
- (44) 『万民調法記』下巻〈大坂 灰屋孫兵衛・大坂 本屋又兵衛・江戸 本屋清兵衛刊』(長友千代治編『重宝記資料集成』第5巻、臨川書店、2006年)。
- (45) 上田萬年・橋本進吉『古本節用集の研究』東京帝国大学、1916年 133～135頁。
- (46) 『下学集』「洛中横小路」「洛中堅小路」《国立国会図書館所蔵(WA 6-121)：同館サイト「国立国会図書館デジタルコレクション」参照》。

- (47) 『拾芥抄』中卷二十二「京程部」〈慶長年間刊本〉《国立国会図書館所蔵（WA7-46）：同館サイト「国立国会図書館デジタルコレクション」参照〉。
- (48) 『掌中歴』（塙保己一編『続群書類従第32輯 上』続群書類従完成会、1978年）108～109頁。
- (49) 前掲注（39）柏原司郎編『増補改訂版 近世の国語辞書節用集の付録』336～339頁。
- (50) 『節用集』下巻〈慶長16年（1611）、烏丸通二条二町上之町刊〉《国立国会図書館所蔵（WA7-70）：同館サイト「国立国会図書館デジタルコレクション」参照〉。
- (51) 石川松太郎『往来物の成立と展開』雄松堂、1988年 103頁。
- (52) 前掲注（3）拙稿④。
- (53) 鍛治宏介編『海士町村上家文書調査報告書』海士町役場、2013年。
- (54) 武井協三「近松の居どころ」（園田学園女子大学近松研究所編『近松研究の今日—近松研究所五周年記念講演録—』和泉書院、1995年）。